# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 132

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

# 目次

2621. 長き座禅を終えて

2622. 脳の共有可能性と素粒子とぶつかる体験

2623.「我思う、故に我在り」という直接体験

2624. 直感的判断の正誤と脳の反応

2625. ゆっくりと近づくゴッホ

2626. ヴァン・ゴッホ美術館と国際ジャン・ピアジェ学会に向けて

2627. 雨と虹、そして明日からのアムステルダム滞在

2628. 雷雨近づく夕方に

2629. 祝福の雷雨

2630. 雷雨から一夜が明けて

2631. アムステルダム滞在に向けて

2632. 書物の読み方の再考

2633.【アムステルダム滞在記】アッセン駅で見舞われたトラブル

2634.【アムステルダム滞在記】宿泊先ホテルの親切なホテルマン

2635.【アムステルダム滞在記】三年振りのヴァン・ゴッホ美術館

2636.【アムステルダム滞在記】国際ジャン・ピアジェ学会の始まりの朝に

2637.【アムステルダム滞在記】ゴッホの色彩感覚

2638.【アムステルダム滞在記】第48回国際ジャン・ピアジェ学会の初日

2639.【アムステルダム滞在記】暴力的な夢

2640.【アムステルダム滞在記】簡素な生活の実現に向けて

© YOHEI KATO 2018

## 2621. 長き座禅を終えて

週末が明け、再び新たな週を迎えた。月曜日の朝はとても静かである。

ここ最近は気温が高くなっており、室内にいてもその暑さを感じる。一日中窓を開け、風を室内に入れることによって暑さを凌いでいる。この地域は夏の最高気温もそれほど高くないため、基本的にどの家にも冷房は付いていない。私の家も同様だ。

夏の暑い日においてもカーテンを閉め、窓を開けていれば十分過ごせる。また、気温が上がるのは午後の四時前後であり、その時間帯を凌げればあとは基本的に涼しい。今日もまた気温が上がるようであり、週末からはまた気温が下がるようだ。

昨日は午後から随分と長く座禅をしていた。途中休憩を入れながら、結局午後から寝る前までずっと座っていたように思う。これほど長く座ったのは本当に久しぶりであった。書物を読むことから離れ、文章を書くことから離れ、曲を作ることから離れるような日曜日の午後であった。長時間にわたって座禅をしていたためか、自分の脳が深い休息と共に蘇生されたような感覚があった。あるいは、再構成されたと言った方が相応しいかもしれない。

座っている最中に雑念が湧き、それが深い洞察に変わり、最後には洞察すら消えているような時間があった。途中に得られた洞察には大変興味深いものがいくつもあり、それは今後折を見て書き留めておきたい。昨日の体験を経て、普段の生活の中で時折集中的な座禅をするのも良いかもしれないと改めて思った。脳が再調整され、以前とは異った状態で自分の脳が動き出しているのがわかる。

小鳥の鳴き声が辺りに響き渡っている。早朝の爽やかな風が街路樹の葉を揺らしている。

七時を迎えた今はもう、朝日が昇り、街全体を優しく照らしている。ここしばらくバッハの曲を聴いてばかりであったが、今朝からはモーツァルトのピアノソナタを聴いている。

どうもまだ脳が調整を続けているようだ。昨日の集中的な座禅によって脳が作り変わり、その調整が進んでいるのがわかる。今日は無理をせず、ゆっくりと仕事に取り掛かるのが良さそうだ。午前中は

まず、協働執筆中の書籍の原稿をレビューする。こちらの方でコメントする箇所があればコメントをする。一つの章の半分ほどを読むだけであるからそれほど時間はかからないだろう。

その後、今週の木曜日から始まる学会の発表に向けたパワーポイント資料を作成する。私の発表は金曜日に行われる。時間としては20分ほどの発表に向けた資料を作成していく。もう一度メールを確認し、質疑応答を含めた発表時間がどれほどなのかを確かめておきたい。

私は「ダイナミックシステム」というカテゴリーに括られるセッションの中で発表を行う。そのセッションでは他に三名ほど発表を行うことになっており、私は彼らの発表が全て済んでから最後に発表を行う。セッションを仕切ってくれるのはオランダ人の経験豊富な教授であり、セッションの進行に関しては問題がなさそうである。今日はとりあえず原稿のレビューと学会発表に向けた資料作りを優先させる。

その他の時間は読書と作曲実践に充てたい。脳と心がまた新たな形で動き始める。自分の存在がまた新たな形で一歩一歩歩みを進めていく。フローニンゲン：2018/5/28（月）07:18

## 2622. 脳の共有可能性と素粒子とぶつかる体験

昨日の長時間にわたる座禅の際に得られた幾つかの洞察について少し思い出している。もっとも大きな洞察は、洞察そのものが溶解し、三昧のような境地に自己が参入しうるということを体験したことであったが、その他に幾つか興味深いものがあったことを思い出している。

一つは、私たちは自分の脳を他の誰かと共有しているのではないか、というものだった。これは非常に突飛な考えであり、私も最初それに驚いた。静かに座り、意識が深まっていくにつれ、自分の脳を別の誰かが活用しているような感覚に陥ったのである。これはとても不思議な感覚であり、同時に一瞬戸惑うものであった。

「一体どこの誰が自分の脳を活用しているのだろうか？」そんな問いが脳裏によぎり、「それではこの意識は自分とは異なる別の誰かが持ちうるものなのだろうか？」という問いが立った。その瞬間、私の脳は悲鳴をあげるかのように甲高い音を上げた。脳が発する悲鳴のような音を聞いた時、最後に立てた問いは誤っているものであることを直感的に知った。

「自分の意識はやはり固有のものらしい。だが、脳は共有しうる」という不可思議な結論がもっとも自分を納得させた。

脳に関してはその他にも興味深い発見があった。よく言われるように私たちは脳のほとんどの部位を活性化させない形で日常を過ごしている。座禅の最中、脳全体が途轍もなく活性化する瞬間があり、脳が構造的に別の次元に再構成されていく瞬間を捉えることができた。すると同時に、自分の思考が普段とは全く別の次元でなされることに気づいた。

これは非常に説明が難しいのだが、ある思考が浮かんだ瞬間に、その思考の奥へ奥へと向かっていくような思考運動が起こり、初期の思考をそれが浮かんだときとは全く異なる次元で眺めているような感覚が生まれた、と言えば分かりやすいだろうか。

一つの思考はある意味観点であり、その観点が実は極めて微細かつ無数の観点で構成されており、どこまでも限りなくその微細な観点に入っていくことが可能になった、という感覚である。また、一つの観点には無数の真実と嘘が内包されており、それらを一挙に全体として把握することを可能にするような現象も起きていた。

昨日の出来事であるから徐々に記憶が失われつつあるが、その他にも印象に残っている体験としては、素粒子とぶつかる感覚があったことだ。より正確には、私の脳が素粒子を捕まえるような現象が起こっていた。座禅が深まっている最中、ある時突然、自分の脳に極小の粒が入り込んできたのがわかり、その瞬間に脳全体が光った。それはとても激しい光であった。

その発光を知覚した瞬間、どういうわけか私は直感的に、自分の脳は素粒子とぶつかったのだ、あるいは素粒子を捕まえたのだ、と思った。人間の意識が深まるとこのような体験をするというのはやはり興味深い。

今から七年前に米国西海岸のジョン・エフ・ケネディ大学に留学していた二年間は、まさにこうした人間の意識の特性について探究を進めていた。ここ最近再び意識の形而上学に関心を持ち始めていたため、昨日の体験を踏まえ、人間の意識が持つ不思議な特性についてまた考えを深めていこうと思う。

© YOHEI KATO 2018

昨日の体験はその他にも幾つか非常に重要な洞察を含むものがあり、それらを思い出した都度書き留めておくことにする。フローニンゲン：2018/5/28（月）08:24

## 2623.「我思う、故に我在り」という直接体験

早朝に天気予報を確認すると、今日は突発的に午後に雨が降るようだった。しかし、今改めて天気予報を確認すると、どうやら雨は降らないようだ。このところ天気予報がよく外れる。それだけ天気の変動性が激しいということだろうか。

今書斎の窓の外に広がるのは、遮るものが一切ない青空である。視線を遠くに遠くに投げかけていくと、果てしない空に飲み込まれてしまうかのようだ。視線を手前に持ってくると、緑に茂った街路樹が目に飛び込んでくる。街路樹の葉の先がそよ風に揺れている。

早朝は静けさに満ちていた街も、今は活気のある雰囲気が漂っている。月曜日の昼食前のこの時間帯は、週末のこの時間帯以上に活気で満ちている。

今日も私は相変わらず文章を読み、文章を書いている。そして午後からは作曲実践をするだろう。自分という一人の人間がこの人生においてすべきことがようやく明らかになってきている。それに伴って、自分の生活のあり方が変わってきている。以前よりも増して読む量・書く量が増え、そして創造活動に充てる時間が増えたように思う。「これでいいのだ」という自分の人生に対する絶対的な肯定感がある。

毎日全く同じことの繰り返し。それでいて、いやそれだからこそ毎日が全くもって新しく思える。昨日と今日の自分は明確に同一な存在であり、同時にまるっきり異なる存在であることに気づく。反復と差異。それが自分の日々を満たしている。

昨日は長時間の座禅のため、読書をする時間や文章を書く時間がほとんどなかった。しかし、長時間にわたる座禅のおかげで自分の脳が再構成されたかのような感覚があり、今日は再び旺盛な読書と文章執筆に時間を充てることができている。脳の古い皮質が剥がれ落ち、新たな皮質が誕生したかのような感覚がある。こうした感覚を生々しく体験してみると、脳に対する関心が強まる。

いや私が注目しているのは物理的な脳ではなく、意識現象の方だ。脳について未知なることは山積みだが、それ以上に意識現象に関することの方が謎が深いように思える。

昨日の座禅体験を経て、再び意識の可能性に関する探究を少しずつ進めていこうという気持ちを新たにした。昨日の座禅の最中、様々な思考実験及び身体実験をしていた。そうした実験の一つの結果として、身体と深くつながることによって一段深い思考が可能になることに気づいた。

そこからさらに、身体とつながることに関しても階層構造があることに気づき、一つ一つ、あるいは時に一挙に階層構造の深くに潜っていくと、自分の脳がこれまでとは異なる働き方をすることに気づいた。身体につながるというのは脳の深層部分とつながることを意味しているのかもしれない。身体意識の階層構造の奥深くとつながることによって、古い思考の膜が剥がれ落ちていくのを知覚する瞬間が何度もあった。

古い思考の膜が剥がれ落ち、新たな思考の膜が現れるたびに、私はその思考の新しさに驚いた。自分でもそのようなことがそのように考えることができるなど思ってもいないことが思考された。思考内容については雑多なものであったが、いかなる思考内容もこれまでの自分には考えられない方法で思考が進められた。それはとても私を驚かせ、しばしば思考することを忘れて思考の中にいた。

自然と完全に合一するのと同様に、自らの思考とも完全に合一することができる。これは言うまでもなく、思考の客体化の未成熟さが生み出す現象とは一線を画しており、それは言うなれば、思考運動との積極的な同一化である。思惟する自分が真に自分になるということ。これはもしかするとデカルトが述べていた「我思う、故に我在り」という言葉に近い「直接体験」なのだと思った。

デカルトの言葉を言葉として認識しても無意味である。これはその他の哲学者の言葉においてもそうだろう。自らの直接体験から出発し、直接的な感覚をもとに思考を深めていくことが不可欠である。そんなことを改めて思う。フローニンゲン：2018/5/28（月）11:34

No.1043: Festivals in Early Summer

I got up before five today, and I could watch a beautiful sunrise. An endless azure sky is appearing right now. A new day that looks like a festival in early summer began. Groningen, 06:38, Monday, 7/2/2018

## 2624. 直感的判断の正誤と脳の反応

昨日の長時間にわたる座禅体験について書き留めていないことがまだいくつかある。座禅の最中にかなり印象的な知覚体験をしていたが、記憶に残っているのは極わずかである。記憶に残っているものを少しばかり書き留め、今改めてまだ書き留めていないことについて思い出している。先ほどの日記では、脳が素粒子にぶつかる体験について書き留めていた。

それに派生して、思考の正誤と脳の反応に関して面白い体験をしたことを思い出した。端的には、正しい思考をすると脳内が心地良い振動で揺れ、脳の深層構造に自分が繋がっていく感覚があった。一方、誤った思考をすると脳内に耳鳴りのようなものが走ることがわかった。おそらくこれは特殊な意識状態における異常な知覚現象だと思うが、実験的に誤った考え方をしてみると、耳鳴りのようなものが脳内に何度も走ったことからも、上記の発見事項はそれなりに信頼性があるように思われる。

ここで述べている正しい思考・誤った思考というのは、単純に事実的な正誤に関するものというよりも、感覚的な正しさと言った方がいいだろう。直感的な判断力が導く正しさというものが存在しており、直感的な判断が正しい場合には脳内に心地良い振動が生じ、それが誤っている場合には脳内に不快な振動がもたらされる。そのような現象を知覚していた。

ここからさらに考えらえるのは、直感的判断の正誤には美的なものが関係しており、美的なものは脳に心地良く感じられるのかもしれないというものだ。直感的判断と美的判断の関係性について考えていくと、真や善と美の関係性がより明らかになってくるように思えた。

座禅中にはさらに、芸術の意義に関する洞察のようなものが閃き、そこから自分がこれからどのような歩みを進めていくかについてのヒントのようなものが得られた。芸術の意義について哲学的な考察を行い、自ら芸術実践を行うという意思がより明確なものとして浮かび上がってきた。

それと密接に関わる主題は、芸術教育と人間発達であり、近い将来それらの主題の探究に対して全てを捧げるようになるかもしれないという予感がした。一夜が明けてもその予感が消えることはない。予感が現実になっていく道筋がはっきりと見える。また、自分がその道を毎日一歩一歩歩んでいることもわかる。全てが正しい方向に着実に進んでいると直視する。

今日は昼食後に散歩がてら、近くの郵便局に足を運ぶ。一昨日に不在届けが郵便受けに入っており、それはおそらくイギリスに注文した書籍だと思う。おそらくそれは、ヘレナ・ブラヴァツキーの1600ページにわたる“The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy (2014)”だと思う。この夏、静かにその書籍を読み進めていく。フローニンゲン:2018/5/28(月)11:52

No.1044: Ripples of a Festival

A festival starts from ripples that generate waves of the next festival. After all, every day always encompasses elements of non-ordinary festivals, and each day is a ripple. Groningen, 07:06, Monday, 7/2/2018

## 2625. ゆっくりと近づくゴッホ

時刻は夕方の七時半を迎えた。今日は一日を通して気温が高かった。フローニンゲンの夏の平均最高気温は22度ぐらいであるが、今日は最高気温が29度もあった。湿気が少ない分、そうした気温でも過ごしやすいのが唯一の救いである。今も爽やかな風が流れている。小鳥の鳴き声が遠くの方から聞こえて来る。その鳴き声は午前中の響きと似ているように思われる。

今日は午前中に小林秀雄氏の全集『ゴッホの手紙』を読んだ。小林氏もゴッホに多大な関心を持っており、私も足を運んだことがあるゴッホの作品を最も多く展示している二大美術館「ヴァン・ゴッホ美術館(アムステルダム)」と「クレラー・ミュラー美術館(オッテルロー)」に小林氏も訪れたことがあるようだ。

ちょうど明後日にアムステルダムのゴッホ美術館に三年振りに訪れる計画を立てており、小林氏の全集でゴッホを取り上げたもの読むことにした。ゴッホについての詳細をここで語ることはしない。

確かに私はオスロのムンク美術館に昨年訪れて以降、ムンクから多大な影響を受けている。しかし、画家の中で一番私に影響を与えているのは間違いなくゴッホだ。それだけははっきりと言える。

小林氏の文章を読みながら、明後日に訪れるゴッホ美術館への期待が高まっていくのを実感していた。ただし、それはとても落ち着いた気持ちの高まりであった。特に何か特定の作品を見に行くわけではなく、所蔵されているゴッホの全作品をもう一度鑑賞してくる。鑑賞の際には、とにかくよく作品を眺めることを心がけたい。

特に自分を捉えてやまない作品があれば、それだけを眺め続けていてもいいぐらいだ。明後日からはアムステルダムで行われる三日間の学会に参加するため、アムステルダムに滞在する。仮に午後一番にホテルのチェックインができれば一旦荷物を置き、ホテルから歩いて20分ほどの美術館に向かう。水曜日はゆっくりとフローニンゲンを出発し、アムステルダムに着いてからは閉館ギリギリまでゴッホ美術館で時間を過ごそうと思う。

この夏は再びゴッホの手紙の続きを読み進めていく。小林氏の全集の一巻ではなく、昨年イギリスから取り寄せたゴッホのデッサンと絵画作品が手紙の文章の横に添えられている全集“Vincent van Gogh – The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)”だ。これは全六巻、2200ページにわたって4300ほどのイラストが挿入されている（価格は400ポンド：およそ6万円であった）。この夏は時間をかけてゆっくりと手紙の全てを最後まで読み通していく。

水曜日の美術館への訪問、そして夏にゴッホの手紙を一つ一つ読み進めていくことによって、ゴッホがまた自分にとって近しく、かつ重要な存在になっていくだろう。

今日は午後から学会の発表に向けたパワーポイント資料を作成した。改めて発表時間を確認すると、発表者は三名ではなく、四名であることがわかり、一人当たりの発表時間はおよそ18分程度であることが判明した。これは質疑応答も含めてであるため、実際に発表する時間は15分弱になるだろう。そうした見積もりを立ててから資料を作成した。二時間半ほどの時間をかけて無事に資料が完成した。

© YOHEI KATO 2018

明日は午後から、この資料をもとにプレゼンの予行練習を何度かする。もし追加で盛り込む必要のある事項があれば資料に付け足す。発表時間が限られているだけに、必要なことをうまく説明するように心がけたいと思う。フローニンゲン：2018/5/28（月）19:50

No.1045: An Icy Castle

Today's weather in Groningen is brisk and very comfortable. I'm imagining about the life in an icy castle. Groningen, 11:59, Tuesday, 7/3/2018

## 2626. ヴァン・ゴッホ美術館と国際ジャン・ピアジェ学会に向けて

薄い雲に覆われた落ち着いた朝。いつも以上に小鳥たちが鳴き声を上げており、その様子は大合唱のようだ。空に雲が覆われているため、今朝は朝日の光が街に降り注いでいない。それにしても昨日は随分と気温が高かった。

思い返してみると、つい二週間ほど前は寒いことに対して嘆いていたが、ここに来てこの気温の高さを嘆くような自分がいる。人間とは身勝手なものである。しかしどうやら今日は曇りであり、午後から雨が降るようであるから、幾分過ごしやすい気温になるだろう。天気予報を見ると、今日か明日は雷を伴う雨が降るらしく、ここ最近の天気の様子を見ているとそれもうなづける。

雷が来そうな晴れの日であると自分の感覚が伝えている。今日は昨日よりも風がなびいている。目の前に見える街路樹の枝と葉が波打つように風に揺られている。その揺れは決して激しくはないが、とても小刻みだ。

今日は早朝にまずプラトン全集を読み進めていく。1800ページの全集のうち、ようやく500ページまで到達した。今日は“Phaedrus”の章を読み進めていく。当該箇所を読み終えたら、次にシュタイナーの“Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)”の続きを読み進め、今日中に本書の一読目を終えたいと思う。

先日シュタイナーの色彩論を読み、非常に大きな示唆をいくつも得た。それと同様に、本書からも音楽と人間存在の関係に関する洞察をいくつも得ている。本書は繰り返し読むべき本であり、まず

は一読目を今日中に終えようと思う。シュタイナーの書籍を読み終えたら、今度は小林秀雄氏の『ゴッホの手紙』の続きを読み進めていく。本書からも随分と刺激と励ましを得ており、今日中に残りの全てを読むことになるだろう。

なにせ明日はアムステルダムにあるヴァン・ゴッホ美術館に行くのであるから、本書は今日中に読み終えておく必要がある。ゴッホの作品を世界で最も所蔵しているこの美術館に三年振りに訪れる。この三年の歩みを確認するかのようにゴッホの作品を眺める。ただ眺める。無心に眺める。

また、これまでの歩みのみならず、これからの歩みを確認するためにゴッホの作品を眺めたい。この美術館はギフトショップが充実しており、今回も何かしらの資料を購入したい。昨日美術館のウェブサイトを眺めていると、「日本とゴッホ」と題したカラー写真入りの画集が販売されていることに気づいた。その他にも“Insanity”と題された画集もあり、それら二つの画集が特に私の関心を引いた。

現地に行き、直接自分の目で見てから購入する資料を確定したいと思う。画集を購入するために、今日の空いた時間にゴッホの全集”Vincent van Gogh – The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)”を再度確認しておきたいと思う。本書は全六巻にわたり、2200ページほどあるが、一通り中身を眺め、明日購入する画集と内容や構成に関して重複しないようにする。本当に明日が待ち遠しい。

明日からアムステルダムに宿泊し、明後日から国際ジャン・ピアジェ学会に参加する。私の発表は金曜日の最後の時間帯である。当日の発表に向けて、今日は午後から何回かプレゼンの練習をしようと思う。自分が行った研究をプレゼンするため、内容に関しては自分が一番熟知しているのだが、それでも発表の時間が短いため、無駄なく確実に研究内容を伝えられるようにプレゼンの練習をしておくことが大切だ。

今回の学会は、ピアジェ派、新ピアジェ派、さらには新・新ピアジェ派を代表する研究者が何人も参加するため、彼らの発表をとても楽しみにしている。自分の中でまた何かが動き出すに違いない。
フローニンゲン：2018/5/29（火）06:28

No.1046: Another Sky

Today's sky is transparent. I'll make a presentation for my research and complete the third master's degree today. I convince myself that the sky would look different tomorrow. Groningen, 10:05, Wednesday, 7/4/2018

## 2627. 雨と虹、そして明日からのアムステルダム滞在

初夏の穏やかな風がフローニンゲンの街を駆け抜けている。そうした風を感じながら、自分の内側に脈打つ内的な鼓動を感じている。今日はどうしたものか、本当に小鳥たちがいつになく鳴き声を上げている。とても快活な鳴き声だ。

果たして今日は本当に午後から雨が降るのだろうか。今の空を見る限り、天気予報がいよいよ怪しくなる。個人的には午後から雨が降って欲しいと思う。天気雨のような雨が幾分降ってくれれば、どことなく涼しげな雰囲気になるだろうと期待している。

また、こうした天気の中で雨が降れば、間違いなく遠くの空に虹が見えるだろう。そういえばここ何ヶ月間も虹を見ていない。おそらく最後に虹を見たのは、昨年の冬にデ・ホーヘ・フェルウェ国立公園へ訪れた時だったと思う。雨が恋しく、虹が恋しいような気分になる。

昨日と今日を通じて、夢の世界がとても落ち着いている。先日までのざわつきとは打って変わって、自分の無意識の世界が穏やかであることを感じる。このようなことを書くと、大抵今夜は何か印象的な夢を見そうだが、とにかくここ二日は印象的な夢を見ていない。今朝方にも夢を見ていたことは確かであり、夢が自分の無意識に浮かび上がっていたという感覚はあるが、その内容は覚えていない。天気と同様に、人間の無意識が持つ変動性は驚くべきものだと改めて思う。

明日からは学会参加のためアムステルダムに宿泊する。午前10時か11時にフローニンゲン中央駅を出発する列車に乗ろうと思う。ホテルに少し早めに到着することになるが、もしチェックインが可能であれば速やかにチェックインを済ませ、もしチェックインの時間として早すぎるようであればホテルのロビーで仕事をすることにする。

ホテルのチェックインを済ませたら、その足でヴァン・ゴッホ美術館に向かう。当初の予定では、明日の夜にオルガンコンサートに参加したいと思っていたが、調べてみるとその日に行なわれているコンサートはないようであった。アムステルダムには立派なパイプオルガンがいくつかの教会にあるようであり、いつかアムステルダムの教会でパイプオルガンの音色を聴いてみたい。

今回は日程に合うコンサートがなくて残念だが、来月にはフローニンゲンの街の小さな教会でバッハのアンサンブルコンサートに参加することになっている。また、秋にはマルティニ教会で行われるパイプオルガンのコンサートにも参加する予定であるため、オランダにいる間に教会で音楽を聴く機会に恵まれていることには感謝をする必要がある。

今日は昼食後に作曲実践を行う。その際にはバッハに範を求めて曲を作り、夜にはバルトークに範を求めてさらに一曲作りたいと思う。今の私はやはりまだ作曲実践に全身全霊を捧げることができていない。人生のこの時期においては他の幾つかの仕事に従事するのは宿命のようだ。

学術研究や日本企業との協働プロジェクトと並行する形で今は作曲実践に打ち込んでいく。毎日多くの時間を費やすことができず、結果として少しずつしか進歩を実現することができないが、今はそれでいいのだと納得させている。

人生にも季節があり、その季節においてやるべき事柄があるのだ。今はそれらに専心する。しかしいつか、ゴッホのように激しく創造活動だけに従事するような日々が来ると願っており、そうした日が来ると確信している。フローニンゲン：2018/5/29（火）10:25

## 2628. 雷雨近づく夕方に

今の気温はなんと31度を越した。これは北欧にほど近いフローニンゲンにとってみれば異常な気温である。時刻は夕方の四時を迎え、当地において一番気温が高い時間帯に入った。太陽が燦々と輝いており、夏の様子を呈している。

まさかこれほどまで気温が高くなるとは思ってもみなかった。天気予報を再度確認してみると、今から数時間後には雷雨に見舞われるようだ。熱せられた地面に雨が降り、夏の晴れの日に雨が降った時に発せられる固有の香りが想像される。

今日は五時過ぎに起床して以降、旺盛な読書を行い、同時に日記を幾つか書き留めてきた。日記に関しては今日はそれほど書いていないが、今日はすでに二曲作った。当初の予定ではバッハの曲に範を求めようと思ったが、結局まずはバルトークに範を求め、少し休憩をとってからモーツァルトに範を求めた。現在参考にしている曲はモーツァルトが六歳の時に作ったものであり、その曲を眺めていると、やはりモーツァルトの才能は傑出していたのだと思わされる。

しかし、以前にも書き留めていたが、モーツァルトと言えどもやはり六歳の時の作品はまだまだ未洗練だと言える。私はあえてそうした未洗練の曲から学び始め、モーツァルトの作曲家としての発達過程を辿るかのように、徐々に洗練された技術を学んでいく。

燦然と輝いていた太陽が突然曇りだした。そして、空がゴロゴロと音を立て始めた。いよいよ雷雨がやってくるようだ。

午前中に、小林秀雄氏の全集『ゴッホの手紙』を読み終えた。ゴッホについてはもう何も言うことはない。一人の表現者として、そして最後の最後まで自分として生きたゴッホに多大な敬意を払っている。ゴッホの研究を進めていきたいという気持ちが再燃する。

あえて「研究」と書いたが、これは文字通り「研究」だ。ゴッホが残した全ての手紙と全ての作品のイラストが収められた全六巻の全集をこの夏に必ず読み通す。それほどまでにゴッホの存在は私を捉えてやまない。オランダに三年間もいるのだ。その意味は自分が一番知っている。この一年間はゴッホをより深く知り、それを通じて自分をより深く知ることを行っていく。

作曲家については誰の研究をする必要があるだろうか。モーツァルトだろうか、それともベートーヴェンだろうか。バッハに関しては文章としての資料が少なく、それが非常に残念だ。モーツァルトとベートーヴェンについてはすでに文献を幾つか揃えているのだから、それらを元に彼らの研究をしていこうと思う。文献を通じて、そして何よりも彼らが残した楽譜を通じて二人の偉大な作曲家に迫っていく。

欧州での三年目の探究の主眼は芸術と人間発達以外にない。それに付随した領域として意識の形而上学と美学がある。欧州にあと一年人生のこの時期に残れるということがどれだけ貴重で幸運なことかを考えなければならない。とにかく旺盛な探究をこの一年進めていく。

© YOHEI KATO 2018

空が完全に曇り、いよいよ雷雨がやってくるだろう。先ほどから空がゴロゴロと鳴り響いている。小鳥たちはどこかに身を潜めてしまっている。

ちょうど先ほどシュタイナーが音楽について論じた、“Music: Mystery, Art and the Human Being (2016)”を読み終えた。シュタイナーが色彩について論じた、“Colour (1992)”に引き続き、本書はとても洞察に溢れていた。これら二つの書籍は折を見て何度も読み返す良書である。繰り返し読むために目に付きやすいところに置いておいた。ここからは森有正先生の日記を少しばかり読み、学会発表のプレゼンに向けた予行練習を行う。フローニンゲン：2018/5/29（火）16:36

## 2629. 祝福の雷雨

空が地鳴りのような音を響かせ始め、いよいよ雨が降ってきた。私は思わず立ち上がり、書斎の窓の方に駆け寄って外を眺めた。小鳥たちがピヨピヨ鳴きながら雨宿りの場所を探し始めた。雨粒の様子を確認してみると、半分以上の雨粒がとても大きいものに映った。

私はコーヒーを片手に窓際からしばらく外を眺め続けていた。自転車で道行く人たちが急いで自宅に戻ろうとしている。空は相変わらず地鳴りのような音が鳴り響いており、積乱雲がフローニンゲンの空を完全に覆っている。大粒の雨が降ったり止んだりする光景を私はぼんやりと眺めていた。

同じことを何度も書き留めていくことの意義。繰り返し繰り返し書くことの意義。いや、書くという行為そのものが持つ意義について改めて考える。とにかく書き続ける。書くことによって思考を深め、書くことによって存在を深めていく。それが生そのものを深めることを導いていく。

書くべき内容がいかに同一のものであっても構わない。それが自分を惹きつけるものである限りにおいては。同一対象について文章を書いたとしても、書けば必ず対象に関して新たな側面が開かれていく。それが反復と差異の根幹原理である。同一対象について書くことによって、これまで見えなかった側面を浮き彫りにしていく。書くことは反復と差異の原理に基づいてなされ、自己の存在および人生を深めることに結びついていく。

先ほど、自分が様々な経験を経て作曲に至った理由について思いを馳せていた。なぜ作曲に行き着いたのか？そこに明確な理由を見出すことは難しい。何が私を作曲に導いたのだろうか？そこに明瞭な因果関係を見出すことも難しい。事態はそれほど単純ではない。

だが、一つ単純なものを挙げるとするならば、音楽経験の一切ない自分が作曲を始めたことには何らかの意味があるということだけだろう。おそらく作曲という実践行為を通じて自分にしかできない固有の何かがあるようだ。それを見つけるというよりも、それを造形していく。それは発見されるというよりも、創造されるもののように思えてくる。

今日はこれから湯船につかり、その後に夕食を摂る。夕食後からは学会発表に向けたプレゼンの準備を進めていく。パワーポイントに対して即興的に説明を加えながら、自分の伝えたいことを伝わりやすい形で表現する練習をする。パワーポイントにした資料は随分と研究内容を省略したものであるため、もう一度論文そのものを読み返す。

そもそもこの論文を執筆したのは今から一年前であるから、やはり論文そのものを音読しておくことは大切だ。論文そのものを読む前に、学会に応募した際の資料を読み返すことをしたい。そこに今回の研究の要旨がうまくまとまっている。

突然雨が激しくなった。大粒の雨がフローニンゲンの街に降り注いでいる。相変わらず空は地鳴りのように鳴り響いており、空も分厚い積乱雲で覆われているが、私にはどうしてもこの雨が恵みの雨のように思えて仕方なかった。地上の何かを洗い流すかのように、浄化するかのように降り注ぐこの雨を祝福したい。フローニンゲン：2018/5/29（火）18:03

## 2630. 雷雨から一夜が明けて

昨夜は空に地鳴りが鳴り始め、突然激しい雨が降ってきた。最初その雨粒の大きさに驚かされ、よくよく見てみると、なんとそれは雹（ひょう）だった。大量の氷のつぶてが天空から落ちてくる光景は圧巻であった。初夏のこの季節にまさか雹が降ってくるとは思ってもいなかったため、随分と驚かされた。そこから雷が激しくなり、就寝の際が最も雷雨が激しかった。青白い閃光を眺めながら昨夜は床に着いた。

起床してみると、昨日の雷雨が嘘であるかのように今は静寂だ。薄い雲が空を覆っており、まだ朝日は見えない。今日はどうやら一日中曇りのようであり、午後にはまた小雨が降るようだ。今日からアムステルダムに滞在し、明日からは国際ジャン・ピアジェ学会に参加する。

金曜日の発表に向けた準備については今朝方もう何度か行い、前日と当日にも発表内容を確認しておきたい。今日と前日に練習を何度かすれば当日には最終確認をするだけでいいだろう。

昨日練習をしてみて気づいたのは、“Results”のセクションについてもう少し丁寧に説明をしてもいいだろうということだった。その他の箇所については即興で具体例や補足説明の文章が思いついたが、当該セクションについては説明に詰まるところがあった。そうした箇所を解消し、このセクションの説明が最も大切であろうから、解りやすい説明を心がけたいと思う。

普段は果物しか朝食を摂らないが、今日はアムステルダムの駅からホテルまで徒歩で移動する必要があるため、カレーの残りを食べてから自宅を出発したいと思う。九時過ぎにカレーを食べ、9:40あたりに自宅を出発する。そうすればフローニンゲン中央駅には10時に到着し、アムステルダムまでの列車のチケットを購入し、駅構内のカフェでコーヒーを購入する余裕がある。10:18の列車に乗り、一度ユトレヒトで乗り換えをしてアムステルダムまで向かう。

今回はアムステルダム中央駅ではなく、ホテルと学会会場に程近い駅で下車する。時間にして二時間半弱の移動であるため、その間には過去の日記の編集を行いたいと思う。駅に到着したらすぐさまホテルに向かい、チェックインができればすぐに行う。もし時間が早いようであればホテルのロビーで仕事を続ける。

無事にチェックインを済ませたら、部屋に荷物を置いてヴァン・ゴッホ美術館に向かう。いよいよこの美術館に所蔵されているゴッホの作品と三年振りの再会を果たす。閉館は夜の七時であるため、余裕を持って作品を鑑賞することができるだろう。全ての作品をくまなく鑑賞したら、ギフトショップで必要な文献を購入したい。

美術館を後にする時間帯にもよるが、仮に随分と早いようであれば、ホテルに戻るついでに学会会場に立ち寄り、事前の受付を前日に済ませておきたい。もし時間的に余裕がなければ、受付は当日の朝でいいだろう。

今回の学会はピアジェを代表とする構造的発達心理学の研究者が一堂に会するため、三日間の学会がとても楽しみである。また、フローニンゲン大学でお世話になっている教授も何人か発表者として参加するため、彼らと再会することも楽しみだ。

昨年の研究アドバイザーであったサスキア・クネン教授はゲストスピーカーとして登壇し、現在私が所属しているプログラムの代表を務めるマイラ・マスカレノ教授は土曜日に発表者として登壇する。今回の学会から私は多くのことを学ぶだろう。フローニンゲン：2018/5/30（水）06:08

## 2631. アムステルダム滞在に向けて

雷雨から一夜が明け、早朝の今、小鳥たちが元気良く鳴き声を上げている。起床した五時あたりには幻想的な鳴き声が辺りに響いていたが、今の鳴き声はとても快活だ。小鳥の鳴き声に耳を傾けていると、一日の活動に向けた活力が湧いてくる。

昨日の日記で書き留めていたように、ここ数日間印象的な夢を見ないと述べていたら、今朝方は印象的な夢を見た。かなり強烈な印象を持つ夢だったが、今はその印象が淀んでしまい、どのような夢であったかをほとんど書くことができない。

中学校時代にお世話になっていた数学教師から数学の問題を提示され、それに回答しているような場面が記憶に残っている。だが、もっと大事な何かが夢の中に存在していたという感覚があり、それが何だったかを思い出せないのは残念だ。それはまた形を変えて今後の夢の中で現れてくるだろう。その時にはできるだけ逃さずに観察をしたいと思う。

明日から三日間の学会が始まる。学会期間中は、自分の発表日でないとしてもパソコンを持参し、できる限りその場で気づきや発見などを書き留めておきたい。発表と発表の合間の休憩時間や昼食休憩の後などに文章を執筆する時間があるだろう。会場にいる間のメモは全て英語になるであろうから、ホテルに戻ってから日本語の日記を書き留めておく。学会の進行に合わせて、印象に残っていることはできるだけ克明に書き留めておく。

それが今この瞬間どれほど有用なのかは気にしない。その瞬間の自分を捉えているのであれば、それは全て文章として書き出すに価する。また、自分の内側から自然と出てくるものも文章として書き留めておくに価する。それらを全て書き出しながら学会に参加する。

学会期間中も、宿泊先のホテルでは作曲実践を行いたい。中欧旅行の際に持参した、バルトークの“Mikrokosmos Complete (2016)”を今回も持参する。宿泊先のホテルでは、夜にこの楽譜を参考にして短い曲を作っていく。日記と同じように作曲も完全に毎日の習慣となった。作曲がなければ日々が成り立たなくなったことを心から嬉しく思う。

バルトークの楽譜以外には書籍を持っていかないようにしようと思う。というのも、おそらく今日訪れるヴァン・ゴッホ美術館で何かしらの画集か文献を購入するであろうから、行きの荷物はとにかく軽いものにしたい。また、フローニンゲンからアムステルダムまでの列車の中では、基本的に過去の日記の編集を行いたいため、書籍を持っていく必要はないだろう。

作曲実践が完全に日々の習慣となったことに加え、内的感覚をデッサンすることも新たな習慣になった。そのため、デッサンに必要なノートと色鉛筆を忘れないようにしたいと思う。文章を書くこと、作曲をすること、デッサンをすることは、どこで何をしていてもできる実践となった。あとはそれら三つの実践技術をどれだけ高めていくかが重要になる。それは一生涯をかけて行われるべきものであることを自分は知っている。フローニンゲン：2018/5/30（水）06:27

## 2632. 書物の読み方の再考

昨夜ふと、書籍の読み方について振り返っていた。ここ最近大量に書籍を読む日々が続き、書くことがおぼつかないぐらいに読書に没頭していた。それだけ今の私を惹きつけてやまない書籍が数多く存在しており、実際にそれらが書斎の中にある。この夏は特に集中的に読書を行おうと思っており、書物の読み方については少しばかり工夫がいるかもしれないと思った。

関心領域が多岐に渡っているということも考慮しなければならないが、数多くの書籍を読み進める際に、当然ながらその内容理解と定着が重要になる。これは自分に言い聞かせる必要もないが、一読しただけで書籍の内容が理解できるはずもなく、その内容が定着するはずもない。

ここで重要になってくるのは、やはり繰り返し書籍を読むということだ。ただし、書籍を繰り返す際に重要になるのは、一読目に多くの時間をかけすぎないことだと思う。仮に一読目にじっくり腰を据えて読もうとすると、途中でもうその書籍と付き合うことは十分だと思ってしまう気持ちになってしまったり、仮に最後まで読み通してみたはいいものの、内容理解と定着がそれほど進んでいなかったという経験は誰しもあるだろう。

そうしたことを防ぐために、一読目は正直なところ、その書籍がどのような雰囲気を持つ書籍なのかを掴む程度の読みで十分なような気がしている。書籍の全体像を掴み、どこにどのようなことが書かれているかを把握すれば十分なのだ。もし仮に余力があれば、目に止まる文章の中で自分の関心を引くものや重要なものを選んで読んでいく。このように読み進めていけば一読目は時間がかかることはないだろう。

このようにして一読目を終えた後、次の日か数日以内に同じ書籍をほぼ同様の読み方をしていく。ただしこの際には、すでに下線や書き込みをした箇所を中心に再度それらを読み返すことと、その周辺に記載されている見落としていた重要な記述を見つけるかのように読むことを意識する。

こうすれば二読目もそれほど時間をかけずに行うことができる。ここから三読目、四読目に関しても実はほとんどプロセスは変わらない。このようにして何度も重ね塗りをするかのように一冊の書籍を繰り返し読んでいくことが内容理解と記憶の定着を助けてくれる。とりわけ重要な書籍に関しては是非ともこうした読みを心がけたい。以前にも似たようなことを書いていたように思うが、ついつい過去の悪しき習慣によって精読をしてしまう自分がいる。

精読そのものは否定されるべきものではないが、一冊の書物を全て最初から最後まで精読しようとする読み方は基本的に失敗に終わるだろう。そのように読むことを教育されていたのであれば、アンラーニングが必要だ。

書物は何度も繰り返し付き合ってくれることを望んでいる。何度も繰り返しその書籍と付き合うことによって、徐々に色々なものをその書籍は私たちに開示してくれる。書物と付き合うというのは人付き合いと似ているようだ。こうした読み方は、この夏に完全に習慣となるまで意識的に実践したい。この夏は、意識の形而上学、美学、作曲関係の書籍を大量に読み進めていく予定であるため、実践

対象に事欠くことはない。特に、明日の学会から戻ってきたら、音楽理論のテキストと作曲理論のテキストを一気に繰り返し読むようにしたい。音楽理論に関してはこれまで使ってきた二冊のテキストを読み込んでいく。

作曲理論に関しては項目として、フーガ(一冊)、転調(二冊)、ハーモニー(二冊)、対位法(一冊)、メロディー(一冊)、コード理論(一冊)、作曲の基礎(三冊)を何度も繰り返し読む。書斎の机の上に積み上げられたそれらの書籍を眺めていると、この夏は、どこか中高時代の定期試験に臨むような感覚がするが、その感覚はとても肯定的なものだ。自分の芯からそれを望んでいる。それらの書籍に対する理解と記憶を定着させていくことに多くの時間を充てたいと思う。

学生時代に英単語を覚えるために何度も繰り返し単語帳を読み込んでいたように、上記のテキストを何度も反復させていく。そうすれば、夏を終え、一年が経つ頃には、作曲の技術もまた進歩を遂げているだろう。フローニンゲン:2018/5/30(水)06:58

## 2633.【アムステルダム滞在記】アッセン駅で見舞われたトラブル

フローニンゲン中央駅からアムステルダムに向けて予定通りに列車が出発すると、途中でトラブルがあった。列車がアッセンという街で停車し、その先に進めない問題が起こった。詳細についてはその時には全くわからず、乗客はとにかく列車から強制的に下車させられ、アッセンの駅のターミナルに停車している臨時のバスを用いて近くの大きな街ズヴォレに行くように駅員に促された。乗客は皆駅のターミナルに向かい、臨時のバスが停車している地点を目指した。

乗客が多かったため、臨時のバス一台では全く足りず、バスはすぐに一杯になった。列車の中でオランダ語でしかアナウンスがなかったため、私は何が起こったのか状況を把握するのに手間取り、乗客が全員降りた後に事情に気づき、私もバス停に向かった。

一杯になったバスが発車してから幾分時間が経っても一向に次のバスが来る気配がなかった。バス停で待つ人たちの姿を見ると、通勤に向かうためにスーツ姿の男性がちらほらいた。また、ロッテルダムかアムステルダムの空港に向かう旅行客の人たちの姿もちらほら見かけた。二台目のバスが一向に来る気配がなく、乗客たちの幾人かは苛立っている人もいる一方で、実に落ち着き払って

連れと笑顔で会話を楽しんでいる人も見かけた。こうした状況にあると人間性というものが滲み出してくるのだと改めて思った。

私は、午後からヴァン・ゴッホ美術館に足を運びたいと思っていたので、この予想外の事態に最初は少々戸惑ったが、予定よりも一本早い列車に乗っていたのでそれほど焦りはなかった。アッセンの街に初めて降りたこともあり、私はバス停から見える景色をぼんやりと眺めていた。

バス停の裏にある森をしばらく眺めていても次の臨時のバスが来る気配はやはりなかった。乗客の中にいた旅行客風の一人の男性はこれからフライトがあるのだろうか、タクシーを捕まえ、「ズヴォレに行きたい人は一緒に乗って行きましょう。割り勘でXXユーロです！」とオランダ語でバス停にいる私たちに呼びかけた。その呼びかけに応じる形で何人かの旅行客が追従し、彼らはタクシーでズヴォレの駅に向かっていった。タクシーが去ってから、何もすることがなかった私は、その場にかがみ込み、パソコンを立ち上げて過去の日記を編集し始めた。

いついかなる状況においても文章を書くこと。それを自分に誓ってから本当にそれが自分の習慣となった。私はバス停にしゃがんで過去の日記を編集することにした。しばらく編集をしていると、バス停で待っている人たちが駅に向かい始めた。何が起こったのかを隣にいた女性に聞いてみると、どうやら列車が動き出したようだ。私はそれを聞いてホッとした。そこで私はパソコンを閉じ、再び駅のプラットフォームに向かった。

ズヴォレ行きの列車に乗り込んだ時、私が一昨日に計画していた一時間遅い列車に乗り込んだことを知った。それほど大きな時間のロスをしておらず、最初に計画していた予定表に沿ってアムステルダムに向かうことにした。ズヴォレに向かう列車の中には同じような状況に見舞われて乗客した人たちで溢れかえっていた。列車が出発すると、状況を説明するアナウンスがあった。アッセン駅の先で何か小さな事故があったようだ。

その事故はすでに解決されたことを伝えるアナウンスが流れると、乗客の何人かが拍手をしていた。私の左隣に座っていた、数独をしていた中年女性も笑顔で拍手を始めた。とにかく無事にアムステルダムに向かうことができて嬉しく思う。今はユトレヒトからアムステルダムの駅に向かっている列車の中にいる。あと五分でアムステルダムの駅に着く。アムステルダム近郊：2018/5/30（水）13:34

## 2634. 【アムステルダム滞在記】宿泊先ホテルの親切なホテルマン

アムテルダムでの滞在の初日が今終わりに近づいている。時刻は午後の八時半を迎えた。アムテルダムもフローニンゲンと同じようにこの季節は日が長い。あと一時間半は日が残っているだろう。

つい先ほどホテルに戻ってきた。今日は色々なことがあったので、少しばかり時系列的に振り返っておきたいと思う。何をどのように書き連ねていくかは全く不明だが、筆が流れるままに書き留めておく。

振り返れば今日は五時に起床し、九時過ぎに自宅を出発してフローニンゲン中央駅に向かった。十時台の列車に乗り、まずはユトレヒトまで二時間ほどの列車の旅に出る予定だった。しかし、フローニンゲンからほど近くのアッセン駅の向こう側で何か事故があったらしく、列車がアッセン中央駅で強制的に止まった。その後無事に列車が動き、アッセンから先に進めるようになり、アムステルダム・アムステル駅に午後一時半過ぎに到着した。

ホテルのチェックインは午後の二時からであったからちょうど良い時間と言えばそうであった。予定ではもう少し早めに着き、ホテルのロビーでチェックインの時間まで過ごそうと思ったのだが、ホテルに着いたのはちょうど午後の二時であった。

アムステルダムに用事があるときは、これまではいつもアムステルダム中央駅を用いていた。しかし今回は初めてアムステルダム・アムステル駅で下車した。その理由としては、学会の会場がちょうどこの駅と目と鼻の先にあるためであり、また宿泊先のホテルもこの駅に近いからであった。

アムステルダム・アムステル駅がどのような駅なのか降りてみるまでは全くわからなかったが、駅を降りた瞬間に燦然と輝く夏の太陽と緑豊かな街路樹が目に飛び込んできた。今日の日中のアムステルダムはとても暑かった。半袖で来て本当に正解だったと思う。昨日にアムステルダムも雷雨に見舞われたようであり、湿度が高かったことも暑く感じさせた要因だろう。とはいえ、日陰に入れば非常に過ごし易いレベルの暑さであった。

アムステルダム・アムステル駅のすぐそばには運河が流れている。フローニンゲンの街も運河で張り巡らされているが、アムステルダムの方が運河の張り巡らされている度合いは圧倒的に高い。ちょうど駅のすぐそばにある大きな運河に沿って、私はホテルに向かって歩き出した。いかんせん初めてこの辺りを歩くため、好奇心に満たされた目で辺りを見回しながら歩いていた。

すると、大きな運河の波止場のような場所から水着を着た人たちが運河に飛び込む姿を目撃した。確かに今日は気温が高く、プールか海で泳ぎたい気分ではあるが、お世辞にも綺麗とは言えない――いやむしろ相当に汚い――運河に向かってダイビングする若い人たちの姿を見て大丈夫かと心配してしまった。水が濁っており、何か菌でもいそうな水質なのだが、お構いなしに若者たちが運河に飛び込んでいく。そうした姿を横目に、私はホテルに向かって歩き続けた。

ホテルまでの道のりはオランダ風の個性的な家々が立ち並ぶ光景を見ることができ、とても興味深かかった。フローニンゲンでこうした光景は見慣れているのだが、初めて訪れる場所の住宅街はいつもとは違う目が働くかのようであった。アムステルダムの中心部にはあまり住みたいと思わないのだが、ホテルに向かうまでの道を歩いていると、こうした場所に住むのも悪くないと思った。とにかく落ち着いた生活ができそうな空間がそこに広がっていたと言える。

20分ほど駅から歩くとホテルに到着した。アムステルダムのホテルの価格はどこも高く、今回宿泊するホテルも四つ星のホテルであるからそれなりだ。とにかく旅先では余計なストレスをかけず、宿泊先の自室ではとにかく心身を休めたいという考えを常に持っているため、今回のようにある程度快適なホテルに宿泊することにした。ホテルのロビーに到着すると、アフリカ系オランダ人の小柄な男性が笑顔で出迎えてくれた。

彼の名前はモレノという。モレノは非常に好印象を与える青年であり、受け答えがハキハキしており、おもてなしの心もとても高かった。今日のアムステルダムの気温の高さに関する話や今回は学会の発表のためにアムステルダムに来たことなど、雑談を少ししてから部屋のルームキーを受け取り、受付に置かれていた飴玉を一つもらって部屋に向かった。

部屋に到着して荷物を降ろし、一息入れずにすぐにヴァン・ゴッホ美術館に向かうことにした。ホテルからゴッホ美術館までは徒歩で20分弱であり、閉館時間が夜の七時であるため、四時間ほど美

術館に滞在できると考えていた。四時間あれば十分だろうという算段があったが。宿泊している三階の部屋からロビーのフロアに降りて、受付のモレノに挨拶をしてから出発しようと思っていた。

私:「ではまた後ほど。今からゴッホ美術館に行ってくるよ」

モレノ:「行ってらっしゃい。ゴッホ美術館に行かれるのですね。どうぞごゆっくり楽しんできてください。あっ、待ってください。もうチケットは持っていますか？この時期はチケット売り場が混むんです」

三年前にゴッホ美術館を訪れた時は冬の二月であり、チケット売り場は全く混んでいなかった。この時期はそんなに混むのだろうか？と少し疑問に思ったが、現地のホテルマンが言うのであるからそうなのかもしれないと思った。

私:「えっ、混むの？三年前に一度足を運んだことがあるんだけど、その時はほとんど混んでいなかったような・・・」

モレノ:「この時期は混みやすいんですよ。ちょっと待ってくださいね。今すぐにインターネットで調べます。ヴァン・ゴッホ美術館・・・っと。あぁ、今日はそれほど混まないようですね」

私:「それは良かった～」

モレノ:「あっ、今調べてみると、チケットはオンラインで購入しないといけないみたいです」

私:「えっ？チケット売り場で買えないの？」

モレノ:「そう見たいです。『チケットはオンラインのみで販売しています』とウェブサイトに書いています。いや～確認して良かったですね」

私:「危うくチケットを持たないまま美術館に行くところだったよ。どうもありがとう！」

私はなぜ単に一言「また後ほど(See you later)」の挨拶だけではなく、ゴッホ美術館に行ってくるとモレノに述べたのかわからなかった。おそらく彼の人柄の良さが私にもう一言二言の言葉を促した

のだろと思う。結果としてゴッホ美術館に行ってくると述べて本当に良かったと思う。危うくチケットを購入しないままに現地に向かうところだった。

どうやらこの三年の間にチケットの入手方法が変わり(もしくはこの夏の時期は)、現地でチケットが購入できないようになってしまったらしかった。私はモレノにお礼を述べ、すぐさま自室に戻り、チケットを購入した。ホテルから美術館までの移動時間を考慮して、少し余裕を持たせて「15:15」のチケットを購入した。チケットを無事に購入し、私はすぐに自室を出て、再び受付のモレノにお礼を述べてから美術館へ向かった。

私:「本当に助かったよ、どうもありがとう！それでは行ってきます」

モレノ:「どういたしまして。それでは良い時間を。明日の朝私はまた受付にいますので、ぜひ感想を聞かせてください」

モレノというホテルマンの親切心と人柄の良さにとても良い気持ちになり、私は意気揚々とヴァン・ゴッホ美術館に向かった。アムステルダム:2018/5/30(水)21:06

## 2635.【アムステルダム滞在記】三年振りのヴァン・ゴッホ美術館

ヴァン・ゴッホ美術館に訪れることができて本当に幸せに思う。ゴッホは私にとって、創造活動上の最大の模範にしなければならない。

三年振りにゴッホ美術館を訪れてみて、ゴッホの偉大さに改めて触れ、領域は異なれど、彼を表現活動上の師として仰ぎたいと思う。オランダにいる間に少なくともう一度この美術館に足を運ぶ必要がある。必ずまた来たい。それぐらいに今日この美術館で得られたものは大きかった。この美術館には、何度訪れても新たな発見が常にある。ルーブル美術館のように、いやそれ以上に自分にとっては発見と励まし宝庫なのだ。

三年前とはまた違う印象でゴッホの数々の作品に触れ、美術館内に立てかけられた数々の説明文をこれまでとは違った印象で読み進めていた。そうした感覚的な差異を生み出したのは間違い無く、私がこの三年間で少なからず成熟を遂げていたからだと思う。何よりも、私はこの三年の間におい

て大きな変化を経験した。様々な変化が挙げられるが、最大のものとしては、何より作曲活動を始めたことだ。

兎にも角にもこれが一番大きい。欧州で生活を始めて得られた最大の恵み。それは他でもなく、作曲実践の開始にあると言える。これまでの人生で積み重ねてきたことが全く予想しない形で一つの総体となり、それが欧州での生活を経て発酵され、欧州の文化に触発される形で私は作曲を始めたのだと思う。ちょうど三年前にこの美術館を訪れたのは、フローニンゲン大学に入学する半年前であり、サスキア・クネン教授とルート・ハータイ教授に直接会って話を聞くためにオランダに訪れた時であった。

あの時から今の自分に起こった最大の変化は、自らが芸術活動上の表現者の一人になったことだ。作曲実践を本格的に始めてまだ一年に満たないが、それでも表現者としての活動に従事し始めるのとしないのとでは、ゴッホ美術館で受け取るものが全く異なると思わされた。

ゴッホがいかに全身全霊で絵画の道を歩んでいたか。それが痛いほどに、そして感動的なほどに私に伝わってきた。ゴッホのように修練に次ぐ修練を行っていく。

今日このようにしてゴッホ美術館に訪れたのは本当に何かの偶然であり、何かの導きかもしれない。というのも偶然ながら今日私が美術館を訪れた時の特別企画は、「ジャポニズムとゴッホ」だった。ゴッホは浮世絵から大きな影響を受け、日本の多くの浮世絵師から影響を受けている。中でも、葛飾北斎や歌川広重はゴッホに多大な影響を与えた。

ゴッホが彼らの作品に影響を受けて描いた絵画作品と共に、北斎や広重の作品を鑑賞する幸運に恵まれた。ゴッホの偉大さだけではなく、私は改めて北斎や広重を中心に、日本の浮世絵師たちの技巧の卓越性に感銘を受けた。私はおそらく、美術館内にいる他の人たちとは全く異なる気持ちでその場に飾られていた絵を見ていたように思う。あえてそれがどのような気持ちかについては直接的には語らない。

時代錯誤に思われるかもしれないが、いつか創造活動のために全てを捧げようと思う。日々を創造活動を中心にし、できるだけ簡素に質素に生活を営んでいく。必要なものは自分の創造活動と家族と過ごす時間のみ。その他にあえて挙げるとすれば、読書ぐらいだろうか。あとは何も望まない。

© YOHEI KATO 2018

あと数年以内に、そうした徹底した生活を実現させる。そうした生活を実現するための経済基盤を構築し、全ての仕事を清算した上で創造活動のみに従事する。仮に学術機関に所属しているのであれば、創造活動に関係した探究、それは例えば美学や作曲技術の発達現象などに絞って研究を進めていく。ゴッホや北斎のように、創造に明け暮れた日々を過ごしたいと熱烈に臨む。

そして、人生を閉じる最後の瞬間まで創造活動に従事するという強い気持ちが湧き上がる。欧州での三年目の生活は自分に試練を課そうと思う。この一年の間に自分がどれほど準備ができるのか。創造活動に全てを投げ打つための諸々の準備をどれだけできるのか。それを試したいと思う。アムステルダム:2018/5/30(水)21:36

No.1047: A Serene Hymn

I finished the second master's program for me at the University of Groningen. I can hear a serene hymn to celebrate it. Groningen, 08:20, Thursday, 7/5/2018

## 2636.【アムステルダム滞在記】国際ジャン・ピアジェ学会の始まりの朝に

アムステルダムの滞在二日目の朝を迎えた。今日は普段と同じように五時半あたりに起床し、六時前から一日の活動を開始させた。

昨日はヴァン・ゴッホ美術館に足を運び、そこで多くの時間を過ごした。フローニンゲンからアムステルダムまでは片道で二時間半ぐらいの移動時間がかかる。しかし、オランダ国内の旅行であるためか、疲れは全くなく、この瞬間の心身の状態は極めて良好である。宿泊先のホテルは大きな通りに面しているが、その周りは落ち着いており、昨夜は熟睡することができた。

今ホテルの自室の窓の外を眺めてみると、まだ人影はほとんどなく、とても静かだ。朝日の光だけがすでに活動を開始しているかのようである。昨日は夜の十時を過ぎてもまだ明るかった。完全に日が沈んだのは十時半を過ぎてからではなかっただろうか。今朝五時半に目が覚めた時にはすでに太陽が昇り始めており、太陽は本当に忙しく活動をしている。

今朝方、昨日のヴァン・ゴッホ美術館で得られた感覚が影響をしてか、瞬間的な印象を残す夢を見ていた。夢の詳細は覚えていないが、私が英語を用いて何かを説明しているような場面が印象に

残っている。昨日の体験とそれを通じて自分の内側に流れ込んできた感覚が交差しながら様々な記憶を形作っている。そういえば昨日は、久しぶりに焼肉を食べた。

ホテルからヴァン・ゴッホ美術館に向かう最中、とても美味しそうな韓国料理店を見つけ、夕食はここで食べようと思っていた。美術館の帰り道、韓国料理店に入り、当初はビビンバと何か他の一品を注文しようと考えていた。店の中に入ると、流暢な英語とオランダ語を話す韓国人の若い男性店員がとても気さくに私に話しかけてきた。

案内された席に着き、彼の説明を聞くと、どうやらここは焼肉の食べ放題の店のようだった。普段私は旅行の際は、一人旅ゆえに食事は簡単に済ませることが多い。誰かと一緒でないのに豪華な食事をする必要などほとんどないという考えを私は持っている。そのため、普段からお世話になっているチェーン店のスーパーで夕食を購入しようかと昨日は迷ったが、久しぶりに韓国料理が食べたくなり、その店に衝動的に入った。

結局私は一人で焼肉の食べ放題を食べることにした。結果としてこれは良い選択だったように思う。久しぶりに鶏肉以外の肉を食べ、野菜もふんだんに摂ることによって随分と活力が湧いたような気がした。食事を済ませて店を後にしようとすると、先ほどの気さくな若い男性店員が「また来てください。それか今度はフローニンゲンで会いましょう！」と述べた。私は笑顔で簡単に返答をし、店を後にした。

ふとしたきっかけで、昨日の夕食時の何気ない光景が静かに蘇ってきた。

今日はいよいよ第48回の国際ジャン・ピアジェ学会が始まる。学会の開始は九時であり、結局昨日の夕方に受付を済ますことができなかったので、今日は早めにホテルを出発し、受付をする時間的余裕を持たせたい。ホテルを出発するのは8:10ぐらいにすれば、ゆっくり歩いて行っても学会の会場には8:40前には到着するだろう。学会の代表者からの開会の辞の後に、私をフローニンゲン大学に導いてくれたポール・ヴァン・ギアート教授が75分間にわたるプレゼンテーションを行う。

初日にはその他にも楽しみな発表が数多くあるが、ヴァン・ギアート教授の発表を最も楽しみにしている。ヴァン・ギアート教授は実質的にはすでに退職をしており、現在はどこの大学にも所属せず、趣味である絵画を描き続けているようだ。だが、今でも共著論文として論文を執筆することがあった

り、今回のように学会で発表することも行っている。学術機関から引退をしてもこのような形で学者としての仕事を継続できるのだと教えてくれたのがヴァン・ギアート教授である。

私の発表は明日であり、パソコンを持って行く必要はないが、休憩時間にそれまでの発表で得られたことをメモするためにも今日はパソコンを持参したいと思う。待ちに待った学会の始まりに心が高鳴る。アムステルダム：2018/5/31（木）06:28

No.1048: Anywhere, Nowhere, & Now-here

A peaceful wind is blowing in Groningen. Feeling and watching the wind, I come to think that I can go anywhere in my life. Anywhere would be nowhere, which could be “now-here.” Groningen, 08:53, Thursday, 7/5/2018

## 2637.【アムステルダム滞在記】ゴッホの色彩感覚

国際ジャン・ピアジェ学会への参加に向けて、そろそろホテルを出発しようと思う。学会会場に向かう前に日記をもう一つだけ書き留めておきたい。

先ほどホテルのレストランに降り、エスプレッソをもらい、再度自室に戻ってきた。昨日お世話になったホテルマンのモレノが今朝も受付を担当しており、昨日のお礼を述べた。モレノのおかげで昨日美術館に入ることができたからである。

ヴァン・ゴッホ美術館で見たゴッホの数々の名作、そして特別企画展の「ゴッホとジャポニズム」が大変印象に残っており、ゴッホが大きな励ましと閃きを私に与えてくれたことは間違いない。

先日シュタイナーが色彩について論じた書籍“Colour (1992)を読むと、各色にはそれに対応する固有の感覚があるだけではなく、身体意識の階層とも関係があるようだ。本書に書かれていた事柄をまだ完全に咀嚼できていないため、何度も繰り返し読む必要があるのだが、ゴッホが用いた黄色とオレンジ色に対して特殊な力を感じるのは私だけではないだろう。

太陽の神々しい光のような黄色とオレンジ色には昨日も大いに目を見開かされた。あの力強い鮮やかな色を思い出すだけで、どこか力が湧いてくる。あれは活力を示す色なのだろうか。シュタイナー

の色彩論を核として今後ゆっくりとゴッホの用いた色について理解を深めたいと思う。そうした学びを通じて得られた事柄を自分のデッサンにも活かし、さらには作曲に活かしていく。とにかく曲の中で色を出し、色を描き分けたいと思う。今は全くもってその境地に至っていない。

学習を一歩一歩進めていく必要がある。曲の中に色をつけるにはどうしたいいのだろうか。今のところ即座に思いつくのは、調の設定とハーモニーが曲の色を大きく左右するということだ。一つ一つの調に対する理解を深め、さらには転調に関する技術にも習熟していく。そして、ハーモニーの技術にも習熟していきたいと思う。今日はこれから発達科学に関する学会があるのだが、頭の中は作曲に関することで一杯である。

学会から帰ったら、上記の事柄に関する手持ちの書籍を繰り返し読み込んでいきたいと思う。そうして得られた知識を毎日の作曲実践の中で適用していく。ゴッホが絵画の理論を旺盛に学び、新たな技術を次々にものにしていったように修練を続ける。ゴッホの全ての手紙をゆっくりと読み返しながら、ゴッホがいかに絵画の技術と思想を高めていったのかを追っていく。ゴッホは本当に私の模範である。

昨日ゴッホ美術館で画集を含めた文献を五冊ほど購入した。また、昨年日本に一時帰国していた際に、上野の映画館で見たゴッホの作品のイラストレーションを用いた素晴らしい映画のブルーレイとゴッホの専門家がゴッホの生涯と作品について解説したドキュメンタリーDVDを合わせて購入した。それらの文献と映画・ドキュメンタリーは、学会が終わってからじっくりと目を通したい。今日は終日学会があり、学会からホテルに戻ってきたら、明日の発表に向けて何度か予行練習をしようと思う。昨日も移動中に頭の中で何度か発表の練習をしていたが、今夜は資料を眺めながら発表に向けた最終確認をしていく。

そろそろ学会に向けてホテルを出発しようと思う。早朝のアムステルダムに降り注ぐ朝日がダイヤモンドのように輝いている。朝のアムステルダムの雰囲気はどこかとても甘美だ。アムステルダム：2018/5/31（木）08:03

No.1049: On an Early Summer Wind

A gentle wind is blowing in Groningen. I come to think that it is not so bad to ride on the wind to go to an unknown place. Groningen, 08:45, Friday, 7/6/2018

## 2638.【アムステルダム滞在記】第48回国際ジャン・ピアジェ学会の初日

国際ジャン・ピアジェ学会の初日が終了した。今日は午前九時から夜の七時まで終日にわたって様々な学者の発表を聞いた。どの発表も非常に中身が濃く、初日の学会が充実していたのは確かだが、後半はもう自分の認知的積載量(cognitive load)が限界に来ていたように思う。明日はいよいよ自分の発表があるため、ホテルに戻ってきてからも発表に向けた準備をしていた。準備が長引いたため、時刻はすでに夜の十時半を迎えてしまった

普段であればとっくに就寝している時間帯だが、今日の学会についての印象を走り書きでもいいので書き留めておく。今日の学会の中で最も感銘を受けたのは、一同を集めた大会議室で行われた最初のプレンゼンテーションである。それは、カート・フィッシャー教授の最良の協働研究者の一人であったポール・ヴァン・ギアート教授によって行われたものだ。かれこれ今から五年前に、フィッシャー教授の研究室を訪れ、その後に様々な大学の研究者について教えてもらう中でヴァン・ギアート教授を紹介してもらったことを懐かしく思う。

フィッシャー教授からの紹介を受けて、私はすぐにヴァン・ギアート教授にメールを送り、残念ながらちょうどその年にすでに引退をしていたが、昨年お世話になったサスキア・クネン教授を紹介していただいた。その縁があって私は今フローニンゲン大学にいる。

ヴァン・ギアート教授が執筆した書籍と論文はほぼ全て読んでいると言っても過言ではなく、過去にも何度かメールでやり取りをさせていただいていたのだが、実は実際に会うのは今日が初めてであった。

ちょうど大会議室に入室した時、昨年履修したコースでお世話になったマライン・ヴァン・ダイク教授と出会い、彼女は「ポールはカリスマよ」と述べていた。実際にヴァン・ギアート教授の発表を聞いてみると、本当に人を惹きつけるような発表の仕方であり、ユーモアを交えながら実に興味深い内容を発表してくださった。

私は話を聞きながら思い付いたことを手元のノートにいくつも殴り書きでメモしていた。その中で話の内容と全く関係ないが、「ヴァン・ギアート教授は生粋の科学者であり、生粋の哲学者でもある」というメモを書き留めていたことに今気づいた。ヴァン・ギアート教授の発表を私が面白く感じていたのは科学と哲学の両側面があったからに違いない。私は片方しか含まれていないような発表にあまり関心を持つことができないことを改めて知った。

ヴァン・ギアート教授の発表が終わってからは、小さな会議室に分かれて様々な学者が発表する形式となった。私はヴァン・ギアート教授の発表の後に話しかけに行こうか迷ったが、その時は話しかけることを止めた。教授に話しかけることが躊躇われることは滅多にないのだが、どこか畏れ多いような気がしていた。その後ある分科会にヴァン・ギアート教授も顔を出しており、その分科会が終わった後に、この機会を逃すまいとヴァン・ギアート教授に話しかけることにした。

単刀直入に述べると、ヴァン・ギアート教授に話しかけて本当に良かったと思う。彼がなぜ多くの研究者に慕われているのかがはっきりとわかった。研究者としての力量だけではなく、人柄が本当に素晴らしかった。私は四年前にあれこれとメールでやり取りをさせてもらったこと、クネン教授を紹介していただいたことのお礼を述べた。

四年越しにこのお礼を述べることができたことも私にとってはとても大切なことであった。ヴァン・ギアート教授の発表と彼の人柄については他にも書き留めておきたいことがたくさんあるが、もう時刻が時刻だけにまた機会を見つけて書き記したいと思う。アムステルダム：2018/5/31（木）22:47

No.1050: Running Stars

I was thinking about the movement of stars; they are moving at rapid speed. What seems static can be dynamic in reality. Groningen, 08:55, Friday, 7/6/2018

## 2639.【アムステルダム滞在記】暴力的な夢

いよいよ昨日から第48回の国際ジャン・ピアジェ学会が始まった。昨夜は今日の学会発表の準備に向けて最終準備をしていたため、就寝時間はいつもよりだいぶ遅い11時半頃であった。しかし今朝は普段とほとんど変わらずに六時前に起床した。今朝方は印象的な夢を見ていた。

夢の中で私は砂浜の綺麗な風光明媚な場所を訪れていた。どうやら前職の会社の社員旅行か何かに参加しているようだった。名所である美しい砂浜を見るために私たちは貸切のバスを降り、砂浜に向かった。道中、横にいた何人かの上司の方たちとたわいのない話をしながら歩いていた。その時は仕事の話を一切せず、今回の旅行の名所についてあれこれと話をしていた。

目当ての砂浜が近づいてくると、私は突然左耳に違和感を覚えた。耳に手を当ててみると、チクリとするものがあった。何かと思ってチクリとするものをそっと触ってみると、松の小枝が束になって大量に左耳の中に入っていた。私は慎重にそれらを抜き出しながら歩いていたが、全て除去できたか不安であったため、横にいた上司の方に確認してもらった。

なんとか無事に全ての松を除去できたようであり、私は一安心をした。その後場面が一気に変わり、私はオフィスの中にいた。社内の中で最も大きな権威を持っている人物がオフィス内にやってきて、私が一緒に働いているチームメンバーを全て集めて何やら会議を緊急に開こうとしていた。私と入社したての外国人を除いて、15名ほどのメンバーが会議に召集された。

私は自分が会議に呼ばれなかったことを内心ホッとしているのと同時に、それは自分への期待の薄さのように思われ少々落胆しているようだった。その権威的な人物が私の近くにやってきて、何か一言つぶやいた。その言葉は人間の尊厳を傷つけるような発言であったから、見過ごすことはできず、私は至って冷静な表情でその人物に一言反論をした。それに対して、その人物はまた一言捨て台詞のようなものを述べたので、私は仕方なくその権威的な人物のお腹を殴りつけた。そして至って落ち着いた表情で、続けざまに顔に張り手を食らわせた。

その時私は、「頭を殴ると脳しんとうで死んでしまう可能性がありますから張り手にしておきますね」と述べてから全力でその人物の顔に張り手を食らわさせた。その人物は私の張り手によって倒れこみ、私に殴られたお腹と顔を両方押さえながらフロアの上でもがいていた。

私はその様子を見ながら、少しばかり微笑んで一言その人物に忠告の言葉を投げかけた。そこで夢の場面が変わった。目が覚めると、ホテルの自室の窓から曇った空が見えた。今朝のアムステルダムは雲があり、霧が同時に発生している。一昨日の夏日和は嘘であるかのように昨日は涼しく、また今日も気温が下がるようだ。明日の気温はもっと低い。

© YOHEI KATO 2018

今日は国際ジャン・ピアジェ学会の二日目が始まる。今日の最後の時間帯の分科会で私は発表を行う。学会というのは他の研究者の発表や彼らとの立ち話などを通じて得るものが多いのだが、さすがに昨日は一日中学会会場で時間を過ごし、情報量の観点で少々疲弊してしまった。

昨日の日記で書き留めていたように、認知的積載量を上回るような情報が自分に流れ込んできたのである。今日は自分の発表を最優先させるため、情報を詰め込みすぎないようにしたいと思う。学会の発表目録を確認し、どうしても聞きたい発表だけを聞くようにしようと思ったため、今日は三時過ぎから行われるある分科会の発表だけに参加しようと思う。今日はそれまではホテルでゆっくりとした時間を過ごし、発表に向けた最終確認をしたい。アムステルダム:2018/6/1(金)06:45

## 2640.【アムステルダム滞在記】簡素な生活の実現に向けて

時刻は七時半に近づいてきた。霧が晴れ、少しばかり朝日が差し込み始めた。今日もどこか涼しげな雰囲気を漂わせているアムステルダムの朝。今回学会に参加するついでにアムステルダムに宿泊して正解だったように思う。

学会期間中にフローニンゲンとアムステルダムを行ったり来たりするのは、時間と疲労の観点から全くもって現実的ではなかっただろう。また何よりも、アムステルダム中央駅とは異なる、アムステルダムの街の南にある学会会場近くのホテルに宿泊することによって、その辺りを散策することができたことは幸運であった。というのも、そのおかげでアムステルダムの新たな表情を発見することができたからである。これまでの印象とは異なり、アムステルダムの街に住むこともそれほど悪くはないと思わせてくれるような景観がそこに広がっていた。

今宿泊している周辺は、街の中心部に比べて人はそれほど多くなく、どこか落ち着いた雰囲気を持っている。こうした場所であれば生活をしてみても良いと思わせてくれるものがここにある。ただし私は、昨日も考えていたように、今後は自然の中で暮らしたいと思う。決して街の中ではなく、人がほとんどいないような静かな自然の中に生活拠点を構えたいと思う。

もしかするとこのようなことを考えるのは人生のフェーズにおいて少し早いのかもしれないが、もう街での生活に魅力を感じていない自分がいる。自分が日々打ち込んでいる仕事の性質を考えれば、街にいる必要などほとんどなく、むしろ自然の中にいた方がより仕事に打ち込むことができるように

思う。今後しばらくは街に住まざるをえないと思うが、仮にそうだとしても、できるだけ静かな街を選び、その中でも落ち着いた場所に生活拠点を設けようと思う。とにかく人の少ない静かな環境を求める。

ゴッホの手紙を昨日少しばかり読んでいた。あの時代と今の時代は随分と変わってしまった。以前から考えているように、できれば今後数年以内に諸々の事柄を清算し、Eメールを使わないような生活をしたいと思う。身内にだけ住所を教え、オンラインの買い物で必要なEメールアドレスだけを持っておくがそれは誰にも教えないようにする。

万が一何かやり取りが必要な場合は手紙にする。これは現代社会においてなかなか実現させづらいことかもしれないが、今でもそのような社会があることを知っている。また、オンライン上の過度なやり取りが私たちの精神生活をいかに貧困なものにしているかを考えてみなければならない。昨日も学会参加中に考えていたが、日々の生活の中に創造活動さえあれば他に何もいらないことに気づく。

ただ作り続けるだけの生活。これからの数年間においては本当にごく少数の人たちとだけ付き合いをしていく。あと数年以内に諸々の事柄を清算し、創造活動だけに邁進する簡素な生活を送りたいと思う。その実現に向けて今日がある。

ホテルの目の前の大通りを車が走る音が聞こえ始めた。どうやらアムステルダムも目覚めの時を迎え、一日の活動を開始するようだ。アムステルダム：2018/6/1（金）07:42